

松山幸雄著「鳩山から鳩山へ - 歴史に学び、未来を診る - 」朝日新聞出版 2009年12月30日刊を読む

歴史における個人の役割 - リーダーの選び方を少し変えよう -

1. 私はかねがね「歴史における個人の役割」を重視してきた。つまり、時代の大きなうねりの中にあっても、個々の政治指導者の意志、能力によって、国家の針路は、また人々の幸、不幸は大きく左右される、という考え方である。そういう視点に立ち、ジャーナリストとして長いこと日米両国のリーダーを観察しながら、同じ民主主義国といっても、両国のトップの質に、またトップの選び方に、著しい違いのあるということ、嫌というほど思い知らされてきた。
2. 世界のリーダーはほとんど、国家、あるいは世界を変えよう、あるいは歴史をつくる仕事に積極的に参加しようとの意欲に燃えて仕事をしている。日本が国際社会に伍していくには、トップを選ぶに当たって、これまで日本の組織でよく見られたように、「年齢」「年次」「忠誠心」「貢献度」「敵の最も少ない人」といった尺度ではなく、個人として相手に「おぬし、できるな」と言わせるような、時には敵陣に飛び込んでボールを蹴りこんでくるタイプを送り出すように考えを変えていく必要があるのではないか。
3. リーダーはどういう資質を備えているのが望ましいか、について私は次のような狂歌(?)六首にまとめてみた。
 - (1)「説得力 雄弁 俠気 国際性 冷や飯、修羅場の経験のあること」
 - (2)「柔軟性 庶民性と 清潔感 バイタリティと likability」
 - (3)「志 熱 責任感 判断力 臨機応変 度胸あること」
 - (4)「戦略性 気さく ユーモア スピード感 テレビ映りと ワキ固きこと」
 - (5)「統率力 品位 教養 カンのよさ ぶれず おごらず 家族よきこと」
 - (6)「粘り腰 ネアカ 気配り 決断力 人を見る眼と 星強きこと」
4. もちろんこうした資質を全部持っている人がいたら、それこそ化け物であろう。しかしこれから日本を代表する政治家には、出来るだけそうした資質を身に付けるように心掛けてほしい、というのが50年近く太平洋を行ったり来たりしてきた老政治記者の願いである。以下少し注釈を加えると――

P51 ~ 52

[コメント]

プレハーノフではないが「歴史における個人の役割」を果たすのがリーダーの社会的使命。

- 2009年12月17日 林明夫記 -